

令和3年度
【長期研究2】

トラウマインフォームドケアの普及に関する研究
～支援者及び支援組織の安全・安心な環境構築に求められる視点とは～
(第2報)

要旨

児童福祉領域におけるトラウマインフォームドケア (Trauma Informed Care: TIC) 普及に焦点をあてた長期研究 (3年) の初年度において、TIC 先進諸国における TIC に関する支援者研修の効果測定研究論文の精査を行った。その結果をふまえ、2年目である本研究では、本邦で求められる TIC 研修の要素を抽出することを目的に、児童福祉領域の支援者を対象にアンケート調査を行い、児童福祉領域への TIC 導入で求められる視点を精査した。

オンラインで実施した研修に研究協力者としてアンケートに回答した 50 名の自由記載内容を解析の対象とした。その結果、研究協力者の属性として多様な地域、勤務施設、職種の参加が得られた。TIC は、子どもとその家族が生活する環境全体で共有される必要があることから、こうしたオンライン研修は TIC 普及における重要な一歩といえ、知識を得る場として参加者が研修を活用し、職場で共有する手段として研修を位置づけていることが示唆された。次に、研修構成および内容は 4 部構成とし、「第 1 部 ト라우マへの理解を深める」、「第 2 部 パラダイムの転換 TIC とは」、「第 3 部 支援者や組織へのトラウマの影響」、「第 4 部 安全な環境を創る」とした。各部で共通する構成として、知識の習得と合わせて、個別あるいはグループでのワークとディスカッションを実施した。そのことで得た知識を自身の支援活動にあてはめ、振り返る時間を設けることが可能となり、様々な気づきを得られ、4 部全体を通して参加することで考え方や知識がつながる体験をするとともに、TIC 導入と普及の難しさがどこからきているかに関する理解が納得して得られた。また、TIC 導入には支援対象者だけでなく、支援者自身と支援組織の環境にも注目し、それらの安全安心が整備される必要があることへの視点が芽生え、そのための工夫を模索する様子も言及された。このことから、TIC 研修の構成要素として、本研究で取り上げた構成と内容が児童福祉領域への TIC 導入において必要な要素であることが示唆された。一方で、膨大な情報提示であったことや消化する時間の不足、支援組織への TIC 普及の難しさに関する言及も見られたことから、今後、内容の精査や研修終了後の情報提供のあり方を検討する必要性が示唆された。

研究体制：酒井佐枝子、亀岡智美、加藤寛

I はじめに

近年、児童福祉領域において、子どもやその家族のこれまでの生活背景やトラウマ体験を考慮し、トラウマの視点から関わりをとらえ直そうというトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care、以下 TIC）の重要性が指摘されている [1]。しかし、その導入への困惑も見受けられ [2]、現状の支援をどのように転換させていくかに関する体系立てた知識が、本邦には未だ普及していない現状がある。

児童福祉領域の対象となる子どもの多くは、トラウマの影響を受け、毎日の生活の中に安全・安心を見出すことができない環境を生き抜いてきている。そのため、大人の何気ない言葉かけやしぐさ、やりとりの中に、トラウマ記憶に触れる引き金となる関わりがある可能性もある。したがって、子どもへの支援に携わる児童福祉領域の支援者は、子どもの健全な育ちだけでなく、これまで子どもが生き抜いてきた深刻なマルトリートメントによるトラウマとその影響に気づき、さらなる傷つき体験とならないよう関わること、そして子どもがトラウマから回復することができるよう支援することが求められる。一方で、児童福祉領域における支援者における離職率の高さ、経験年数を重ねてもなお、能力・技能の不足や自信喪失・無力感を抱えながら就労せざるを得ない状況 [3]も明らかとなっており、児童福祉領域で働く支援者とその組織環境のありようもあわせて検討する必要がある。

児童福祉領域における TIC 普及に焦点をあてた長期研究（3年）の初年度においては、TIC 先進諸国における TIC 普及に関する研究論文の精査を行った。その結果をふまえ、TIC の普及には支援者への TIC 研修が不可欠であり、その構成要素は TIC に関するガイドラインに基づいた要素が含まれていること、そして現場の実践に関連する内容構成とする必要性が抽出された。これをうけ、2年目である本研究では、本邦において求められる TIC 研修の要素を抽出することを目的に、児童福祉領域の支援者を対象にアンケート調査を行い、児童福祉領域への TIC 導入で求められる視点を精査した。

II 調査方法

本邦において求められる TIC 研修の要素を抽出するために、米国でエビデンスのある TIC 研修ツール：The Child Welfare Trauma Training Toolkit (CWTTT [4])を参考に、本邦の実情に即した研修内容を開発し、研修を施行した。そして、研修に参加した児童福祉領域の支援者を対象に研修に関するアンケート調査を行った。

II-1. 研修について

児童福祉領域における TIC の実践に関するカリキュラムとして、米国でエビデンスのあるツール CWTTT は、NCTSN（National Child Traumatic Stress Network）が提示するトラウマインフォームド（以下、TI）な児童福祉システムのありようを網羅したカリキュラムである。トラウマが子どもや大人の発達や行動に与える影響、児童福祉システムとして TI を導入するために求められる知識とスキルを、子どもとその家族に直接、接する支援者だけでなく、

管理職にも教育するための各モジュールが整備されている。

本研究では、CWTTT を参考に本邦の実情に合わせて研修内容を以下のように構成し、適宜講義とワークを導入することで、講義内容に関するディスカッションと実践への展開可能性についてグループで話し合う機会を確保した。

「支援者のための TIC」研修内容

【研修一日目】

第1部 ト라우マへの理解を深める（定義と影響）

第2部 パラダイムの転換、トラウマインフォームドケアとは

【研修二日目】

第3部 支援者や組織へのトラウマの影響：一次的・二次的トラウマに気づき何ができるかを考える

第4部 安全な環境を創る

研修の開催にあたっては、本務への様々な影響を考慮し、土曜日に2回（10月30日、11月6日）にわたってオンラインで開催した。このことにより、一日目の研修内容を一週間本務にて振り返りながら咀嚼する時間が設けられ、二日目の研修への動機づけが高められる構成とした。

II-2. 対象と募集

児童福祉領域で支援者として働く者を対象とした。児童福祉領域とは、児童養護施設、児童自立支援施設、乳児院、児童福祉施設、母子生活支援施設、自立援助ホーム、障害児施設、児童相談所、児童家庭支援センター、保育所等を指す。また、児童福祉領域で支援者として働く者は、子どもやその家族などに直接支援を提供している者、管理職の立場の者、組織運営に携わる者を含む。

対象者の募集は、当センターのホームページにおいて研究協力者の募集を2021年9月8日より10月27日まで行った。

II-3. アンケート内容と解析の方法

基本属性の他、研修に関する感想や意見について、自由記載により回答を得た。得られた各自由記載内容について、帰納的コーディングにより共通するコードからカテゴリおよびテーマの生成を行った。

II-4. 倫理的配慮

本研究は、兵庫県こころのケアセンター倫理委員会において承認を得て行った。研究協力

者には、研究説明文にて、研究の目的と意義、方法のほか、研究参加の任意性、同意しない場合でも不利益を受けないこと、同意した後での研究協力撤回の保証等の倫理的配慮について説明し、同意を得た研究協力者のみを対象とした。

III 結果

III-1. 基本属性

研究協力者の基本属性を表1に示す。研究協力者50名のうち、20代が9名（18.0%）、30代が11名（22.0%）、40代が21名（42.0%）、50代が9名（18.0%）で、女性が44名（88.0%）、男性が6名（12.0%）だった。オンラインでの開催であったため、参加者は全国から参加することが可能となり、19都道府県からの参加があった。職場の施設種別では、児童相談所からの参加が最も多く24名（48.0%）の参加があり、続いて児童養護施設からの参加が6名（12.0%）であった。

表1 研究協力者の基本属性

属性		N=50	%
年齢	20代	9	18.0%
	30代	11	22.0%
	40代	21	42.0%
	50代	9	18.0%
性別	女	44	88.0%
	男	6	12.0%
職場のある都道府県			
	大阪府	8	16.0%
	神奈川県	7	14.0%
	茨城県	6	12.0%
	埼玉県、福岡県	各4	8.0%
	高知県	3	6.0%
	兵庫県、京都府、沖縄県、山形県、青森県	各2	4.0%
	東京都、宮城県、秋田県、栃木県、富山県、広島県、愛知県、鹿児島県	各1	2.0%
管理職	管理職である	11	22.0%
	管理職でない	39	78.0%
施設種別			
児童養護施設	職種		
	指導員	2	4.0%
	心理職（常勤）	3	6.0%
児童心理治療施設	心理職（非常勤）	1	2.0%
	指導員	1	2.0%
	心理職（常勤）	1	2.0%
児童相談所	心理職（非常勤）	1	2.0%
	児童心理司	19	38.0%
	児童福祉司（常勤）	3	6.0%
	心理士	1	2.0%
	その他（課長）	1	2.0%
精神保健福祉センター/保健センター	保健師、主査	2	4.0%
福祉型障害児入所施設	心理職（常勤）	1	2.0%
医療型障害児入所施設	心理職（常勤）	1	2.0%
児童家庭支援センター	保育士（ケア・ワーカー）	1	2.0%
乳児院（母子生活支援施設）	心理職（常勤）	1	2.0%
家庭児童相談室	課長補佐	1	2.0%
子どもシェルター	保育士（ケア・ワーカー）	1	2.0%
NPO 法人事務局	プログラムファシリテータ	1	2.0%
児童発達支援事業所	管理責任者	1	2.0%
スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー		3	6.0%
無回答		4	8.0%

現在の職務年数と児童福祉領域での全勤務年数について表2に示す。現在の職務年数が5年以下の者が30名(60.0%)いたが、そのうち10名は現在の職務以前にも児童福祉領域での勤務経験があり、その年数は6年～26年以上と多岐にわたっていた。また現在の職務年数が6年～10年の者8名のうち、3名は以前にも児童福祉領域での勤務経験があり、その年数は11年から25年にわたっていた。現在の職務年数11年～15年の者5名のうち、1名は以前にも児童福祉領域での勤務経験があり、その年数は16年から20年であった。

表2 現在の職務年数と児童福祉領域での全勤務年数のクロス表

現職務年数	児童福祉領域全勤務年数									
	5年以下	N=50 (%)		現勤務年数と同じ	現勤務年数以上 5年以下	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26年以上
5年以下	30	60.0%	16	4	5	2				3
6～10年	8	16.0%	5			1	1	1		
11～15年	5	10.0%	4				1			
16～20年	2	4.0%	2							
21～25年	3	6.0%	3							
26年以上	2	4.0%	2							

現在の職務にかかる資格を複数回答で得た結果を表3に示す。最も多かったのが、公認心理師30名(60.0%)であり、臨床心理士19名(38.0%)、社会福祉士8名(16.0%)、精神保健福祉士7名(14.0%)、教員(中学校)5名(10.0%)と続いた。

表3 現在の職務にかかる資格

資格(複数回答)	N = 50	%
公認心理師	30	60.0%
臨床心理士	19	38.0%
社会福祉士	8	16.0%
精神保健福祉士	7	14.0%
教員(中学校)	5	10.0%
教員(高等学校)	4	8.0%
保育士	4	8.0%
保健師	2	4.0%
教員(小学校)	2	4.0%
教員(大学)	1	2.0%
看護師	1	2.0%
その他	4	8.0%

III-2. 研修に関する感想や意見

III-2-1. 「第1部 ト라우マへの理解を深める」に関する感想や意見

第1部では、トラウマの定義とその影響について具体例やワークを取り入れながら解説した。自由記載について帰納的コーディングにより共通するコードからカテゴリおよびテーマを生成した結果を表4に示す。全体の印象として内容や説明の分かりやすさがあげられ、基本的な内容も網羅されていたため安心して受講できたとする参加者がいる一方で、理解を進めるうえではある程度の知識があることが前提であるという印象をもった参加者もいた。また研修のあり方として配布資料や時間配分、強調するポイントを明確化することの重要性や、研修に参加することで生じる参加の中での内的反応に関する言及もみられた。コンテンツについては、科学的な根拠に根差した知見の習得に対する意欲と、具体的な例示やワークを並行して導入したことによる理解の深まりに関する意見が得られた。そして、研修で得られた知識を職場で共有することや、支援対象者への関わりのヒントとして実践に展開できるといった意見もみられた。

表4 「第1部 ト라우マへの理解を深める」で抽出されたテーマとカテゴリ
(カッコ内は人数を示す)

全体の印象 (13)	
良かった点 (7)	目標が明示、基本的な内容、内容・説明がわかりやすい、すんなりと理解、ワークが実践的、安心して受けられた、グループワークや講義を通して理解が進む
難易度 (2)	盛りだくさんだったので振り返りが必要、ある程度知識があることが前提の内容
配布資料や時間配分 (2)	資料の量も適当で十分、最初に自己紹介の時間があるとグループワークに入りやすい
強調するポイント (1)	トラウマケアをしたり、トラウマの視点を持って支援することが、支援対象者の長期的な影響を弱められる点をもっと強調すると、支援者側のモチベーションにつながる
参加中のトラウマ反応 (1)	支援を担当するケースを思いを巡らせることは起こりうるので、ワークのタイミングや内容がとても良いと思った
コンテンツについて (38)	
脳・神経系 (11)	脳や遺伝子等についても説明してもらえたのがよかった、ぼんやりしていた理解がずいぶん深まった、理解しやすかった、改めて整理できた、とてもわかりやすかった、もっと詳しく聞きたい
トラウマの広範な影響 (14)	世代、地域性、歴史などのトラウマも含めた視点が新鮮で理解が深まった、トラウマの種類や影響などについて視覚的に理解しやすい構成、基本的な内容がわかりやすくまとめられていた、整理できた、関わりのヒントになる
科学的根拠 (4)	根拠が提示されているのがよい、説得力がある、しっかり活用できる
具体的な例示、ワークなど (9)	具体例から実感できイメージしやすい、わかりやすい
職場での適用可能性 (3)	
職場で共有 (2)	「トラウマ」の知識を職場での共有することが大事、子どもや養育者、関係者に伝える時の参考になる
関わりのヒント (1)	外から見えることとその人の中で起きていることに違いがあることを知ることが関わりのヒントとなった

III-2-2. 「第2部 パラダイムの転換、トラウマインフォームドケアとは」に関する感想や意見

第2部では、TICがなぜ必要かについて、物事の規範的な考え方の起源をたどりながら解説し、ワークを通して支援対象者の言動を理解するディスカッションを行った。第2部に関する感想や意見について自由記載から抽出したカテゴリおよびテーマに関する結果を表5に示す。

TICが浸透しない理由や職場内への導入が困難な背景への理解が進み、メンタルモデルやパラダイム、世界観から理解することで納得できたと回答する参加者も多くいた。また、動画に続いて動画解説があったこと、難しい概念について繰り返し説明が行われたことで理解が進んだこともあげられた。内容への理解についても、メンタルモデル、公衆衛生的アプローチの必要性、TIC、パラダイムシフト、恥の概念、子どもへの理解が進んだとともに、自分自身の傷つきへの気づきも得られた。グループワークを取り入れたことで、他の参加者からの刺激を得たという回答もあった。一方で、概念への理解が進まず、混乱したり、もどかしさを感じる参加者や動画が難しかったという意見もみられた。

今後の展開可能性を念頭に参加していることが示唆される回答が得られ、TIC普及の重要性を認識している言及がみられた。パラダイムの転換という考え方を導入した対応や継続研修・スーパービジョン（SV）の意義の再確認、業務の振り返りのアプローチを変えていくといった今後の実践への視座に関する意見がある一方で、どのように職場内に伝達するかに難しさを感じている意見や現場レベル以上の大きな変革が必要であるといった視点も提示された。こうした研修終了後の伝達を視野に、職場研修用資料があるとよいといった主催者への提言もあった。

表5 「第2部 パラダイムの転換、トラウマインフォームドケアとは」で
抽出されたテーマとカテゴリ

(カッコ内は人数を示す)

全体の印象 (29)	
納得できた (24)	学びにつながった、納得できた、TIC 浸透しない理由が理解できた、TIC を学ぶことの意義がわかってよかった
講師解説による理解 (5)	動画解説がよかった、繰り返し説明されたのがよかった
内容への理解の深まり (31)	
メンタルモデルへの理解 (4)	メンタルモデルからの抵抗であることが、TIC 広まらない背景にあることを理解、普及の難しさにつながること、組織内でうまくいかない理由への理解が進んだ
公衆衛生 (3)	公衆衛生的アプローチの必要性への理解
TIC (4)	TIC への理解
パラダイムシフト (15)	パラダイムシフトの必要性、シフトは科学的知見から生じることへの理解
恥 (1)	恥の観点に新しい知見増えた
自分の傷つきへの気づき (1)	組織内でうまくいかないことへの自分の傷つきへの気づき
子どもへの理解 (3)	子どものリマインダー・トラウマ反応への理解、理解を通じた思いやり共感へのシフト
グループワーク (1)	
グループワークの意義 (1)	他の参加者のエピソードから刺激を受けた
困難 (8)	
概念の理解 (6)	パラダイムという考え方に混乱した、難しい、概念理解しきれないもどかしさ、重要性がわからなかった
動画 (2)	動画が難しかった
今後の展開可能性 (9)	
普及 (2)	TIC の考え方が普及することの重要性、普及の具体的方法はまだイメージできていない、
職場理解 (2)	職場にパラダイムシフトを伝えるのは大変
大きな視点からの変革 (2)	現場レベル以上の大きな (医療・福祉・司法) 変革が必要
今後の実践への視座 (3)	パラダイム転換という考え方の導入、継続研修・SV の意義、業務の振り返りのアプローチを変える
主催者への要望 (3)	
事後資料 (1)	職場研修用資料があるとよい
動画 (2)	画面構成 (動画演者の顔大きく)、日本語スライドだとわかりやすい

III-2-3. 「第 3 部 支援者や組織へのトラウマの影響：一次的・二次的トラウマに気づき何ができるかを考える」に関する感想や意見

第 3 部では支援者や組織に生じるトラウマの影響を解説するとともに、参加者自身の状況を振り返る機会をワーク等を通して確保した。表 6 に抽出されたテーマとカテゴリをまとめた。

全体の感想として、ワークやディスカッションを通して自身に生じている体験への気づきが得られた。具体的には、ストレスとトラウマの違いとそれらの相互作用に関する理論的解説や、チェックシート等を通して、自身に生じているトラウマの影響への理解が深まったこと、そうした影響に対してどのように関わればいいのかに関する方略や「負担の少ない振り返り」といった手法を学べたことの意義に関する言及があった。そしてワークやディスカッションを通して、支援者自身や組織に生じていることへの客観的理解が進み、支援者自身の立ち位置やトラウマの影響への気づきとともに、どのように TIC を個人や職場に導入したらいいかに関する視点を模索している回答が得られた。一方で TIC 導入の障壁を指摘する回答もあり、主催者への提言として今後の研修に関する言及や、TIC 普及において支援者がロールモデルとして存在することの重要性や多業種にも本研修内容は及ぶ点を取り入れた普及活動を希望する言及が得られた。

表6 「第3部 支援者や組織へのトラウマの影響：一次的・二次的トラウマに気づき何ができるかを考える」で抽出されたテーマとカテゴリ

(カッコ内は人数を示す)

全体の印象 (3)	
体験を通した気づき (3)	説明がわかりやすく気づきが多かった 、対話や他者とのやりとりは見方を変える・広がるチャンスになることを体験、トラウマの影響の大きさを実感
内容への理解の深まり (8)	
ストレス/トラウマの相互作用 (3)	2つのストレスの相互作用で増幅するという視点は職場で取り入れやすい、組織内のストレスで道徳観の苦悩を言及したのがよかった、支援者もトラウマにさらされ、ストレスフルな職場ということへの理解が進んだ
チェックシート (2)	二次的ストレスを意識する機会になった、自分の状況を客観的に理解できた
一次的・二次的トラウマへの方略 (2)	考えられてよかった、具体的な方略が豊富でよかった
「負担の少ない振り返り」 (1)	これを学べたことが印象的、気にせず話すことに危険があることを学んだ
気づき (30)	
支援者・組織への影響、関係への気づき (18)	初めて学ぶ内容だった、気づけたことが第一歩、ストレスフルな職場という状況を理解、支援対象者・支援者・組織が全体として影響を受け合っているという視点への気づき、職場の安全を考える視点が欠けていたことへの気づき、自分のかかわりが職場の風土を構成していることに着目させ、TICの視点をもつことで組織が変わる可能性があるということに気づいた、仕方ないという雰囲気にしてしまわず、対処方略まで考えることの重要性を再認識、支援者が弱いのではなく、支援対象者のトラウマを体験しているゆえであることが分かった、平衡プロセスへの理解が進んだ、支援者のトラウマを理解したうえで協力しあえると感じた、「試し行動」への関わり方を考え直す機会となった、組織の問題でもあることを知った、管理職になると共感満足が確認しづらく、そのことが仕事をしんどくさせている
自分への影響への気づき (6)	自分自身の二次受傷に気づける講義、これまで気づきにくかった視点を教えていただいた、気づかないふりや向き合おうとしないところがあることに気づけた、自分をケアしていくことを意識していきたい、振り返りを通してトラウマ反応が出ていることに気づけた、自身や組織に起きていることを振り返ることにしんどさを感じた、グループでの他のの方の発言を聞き、少し距離をとり、眺める感覚になった
セルフケア/セルフケアを個人の責任にしない (6)	セルフケアを自己管理や自己責任にしない点が印象的、セルフケアへの気づきにつながった、自分自身や組織をどうやってケアしていくのかを具体的に学び、考えることができた、個人の責任では追いつかないほどの子どもの傷付きに日々支援者が晒されていることにとっても納得できた
今後の展開可能性 (13)	
個人・職場での TIC 導入のきざし (9)	職場内で衝撃的な内容を話すときの話し方を具体的に変えていける、トラウマの影響は支援者・組織も受けることを認識し対処方略までしっかり考えることが重要と再認識、職場の安全を考える視点がかけていたことへの気づき、職場でできることとこれからの取り組みが明確になった、自分で実践して使いこなせるようになってから職場に発信したい、ロールモデルとして、生き生きと生きることを楽しんでいくことが実践できれば素晴らしい、児童福祉領域の支援者のストレスが強いことを知り、自分なりの対策をとろうと思う、日々追われる業務野中で自分のケアを意識していきたい
導入の障壁 (4)	心理ならではの視点の大切さを組織にどう伝えるかが悩ましい、組織の認識変化も必要、福祉領域は支援者のボランティア精神に頼りすぎ、道徳観に関連するストレスから離職する職員も多い、支援者自身のケアと安全を実践しながら仕事をする風土が日本にはまだない
主催者への要望 (5)	
具体の提供 (5)	研修内容をどう組織と共有するかの道筋やステップがほしい、組織での取り組み事例紹介希望、組織がトラウマの影響を受けている時の状態を具体的に知りたい、支援者のロールモデルとしてのありようの大切さを広めてほしい、多業種にもこの内容は及ぶ点に触れられていると身近に感じられたかもしれない

Ⅲ-2-4. 「第4部 安全な環境を創る」に関する感想や意見

第4部では、4つの安全と安全の脅威となることに関する解説の後、安全方略についてグループで話し合うワークを行った。自由記載内容に関する分析結果を表7に示す。

全体の感想として4つの安全に関する知見を深められたこと、特にモラル面の安全について知ることができたことに関する意見がみられた。また、安全やトラウマ反応、パラダイム転換など2日間を通した学びが第4部でさらにつながったという意見もみられた。第4部ではグループワークを中心に構成したが、ディスカッションや講師のコメントを通した理解の深まり、グループや全体シェアリングでの情報共有を通した工夫の蓄積が言及された。一方、グループワークの課題として、時間が足りなかったことや、安全な環境に関するグループ内での概念のとらえ方の違いがみられた。学びの内容として、安全・安心の作り方や「トラウマのメガネ」を実践にあてはめて振り返ったこと、子どもの安全・安心を考える際には支援者の安全・安心が大切であること、職場内の人間関係やコミュニケーションの重要性とともに、現状への理解としてトラウマの影響を受けている現状やそれによる組織内の人間関係の悪化とケアに時間がとれない現状について言及があった。

表7 「第4部 安全な環境を創る」で抽出されたテーマとカテゴリ

(カッコ内は人数を示す)

新たな知見 (8)	
新たな知見 (8)	安全の重要性、安全を改めて学べてよかった、モラル面の安全、すべてパラダイムの転換とつながる、支援者のトラウマが組織に影響する、安全対策・行動を具体化しやすくなった
グループワーク (14)	
ワークの導入 (6)	ワークを通して理解が進んだ
ディスカッション (3)	他の参加者に支えられた、工夫知った、情報共有できた
全体シェアリング (3)	全体シェアリングよかった、安全方略の意見が参考になった
講師のコメント (2)	コメントのわかりやすさ、フィードバックで支援の気づきになった
グループワーク課題 (3)	
時間不足 (2)	ワーク、ディスカッションの時間もう少しほしかった
概念のとらえ方の違い (1)	参加者間で安全な環境に関するとらえ方に違い
学び (10)	
安全・安心の作り方 (3)	TIC (トラウマの三角形) 理解が前提になる、意図的に作る必要性、安全な環境作る手段たくさん知ること、選択肢増える
実践の振り返り方 (1)	トラウマのメガネで実践を振り返ることができた
すべてにおける安全安心の確保 (3)	子どもの安全安心には、支援者の安全安心大切
人間関係・コミュニケーション (2)	職場内の人間関係・コミュニケーション大切
組織の現状への理解 (1)	トラウマ受傷による組織内の人間関係の悪化とケアする時間の欠如
組織・支援に求められること (9)	
共通認識の形成の必要性 (4)	多職種連携における環境整備はだれでも始められる、同じ安全の認識を持つ、組織・チームの理想や理念の共有がまず必要
支援の姿勢を再認識 (5)	職場の改善点への気づき、支援対象者のトラウマ・安全方略を考える、組織単位で意識することで支援者のパフォーマンス変わる
ふりかえり (2)	
振り返りの必要性 (2)	盛りだくさんだから、実践には復習が必要、常に危険な環境での安全
主催者への要望 (6)	
より詳細な説明の希望 (6)	安全方略の説明・例示、安全方略ワークの前に安全を確認した方が考えやすかった、安全・トラウマ反応・パラダイムについてもう少し深掘りしたい、概念の区別化

IV 考察

児童福祉領域における TIC 普及に向けて、TIC 習得に向けた児童福祉領域の支援者対象者の研修に求められる要素の抽出を目的に、研修の実施及びアンケート調査を通じた研修内容の検討を行った。

IV-1. 研究協力者の属性について

本研修は週末にオンラインでの実施であったことから、研究協力として研修に参加した解析対象者 50 名は、全国各地域から参加し、地域という場所や職務時間内といった参加の障壁となる負担が軽減されたことが伺われる。また、管理職の参加も 22% 得られ、TIC が子どもとその家族に直接支援を提供する支援者だけでなく、組織としての取り組みとして導入する必要性を意識していることが示唆された。

参加者の年齢構成として 40 代 (42.0%) が全体の中で最も多い中、現職の勤務年数は 5 年以下 (60.%) である割合が全体の中で最も多かった。現職の勤務年数が 5 年以下であるものの、児童福祉領域での全勤務年数がそれよりも長い者は 10 名 (33.3%) いた。このように、現職の勤務年数と児童福祉領域での全勤務年数に違いがあったのは現職の勤務年数が 15 年までの者においてであり、現職の勤務年数が 16 年以上の者では児童福祉領域での全勤務年数が同じであった。医療・福祉領域における離職率(令和 2 年:14.2%)の高さ [5]はたびたび指摘される場所ではあるが、現職の勤務年数が少ない者ほど離職の経験を有している割合が高いことが示唆された。

参加者の現職の施設種別と職種では、児童相談所の児童福祉司(38.0%)をはじめとして、多様な施設種別からの参加が得られた。また関連する資格においても、公認心理師(60.0%)、臨床心理士 (38.0%)、社会福祉士 (16.0%)、精神保健福祉士 (14.0%) といった子どもの心理臨床や児童福祉に関連する資格を有する参加者だけでなく、教員や保育士、保健師、看護師など多様な資格を有する参加者が参加した。TIC は、子どもとその家族が生活している環境全体で共有される必要がある視点であり、そのためにあらゆる支援者や子どもとその家族に関わる周囲の人が共通理解を持つための取り組みが求められる。本研修では、子どもとその家族に関わる多様な資格や職種の参加が得られた。このことは、普及における重要な一歩といえ、知識を得る場として参加者が研修を活用し、職場で共有する手段として研修を位置づけていることが示唆される。

IV-2. 研修構成について

「支援者のためのトラウマインフォームドケア」と題する本研修は 4 部構成で、全体を通して学ぶことで TIC への理解、特に支援者や支援組織に生じていることへの理解を深めることができる構成となっている。わかりやすい解説と視覚情報を通して、新たな知見を各部分で得たことが言及され、TIC 導入の難しさがどういったところからくるかについて、研修内容が進むにつれて実感を伴って理解する様子が示唆された。内容や繰り返しの説明がわか

りやすく、気づきが多く得られたとする意見も多数得られた。視点を転換させ、視野を広げるチャンスや、対策や行動を具体化しやすくなっていくプロセスを研修時間内での気づきを通して得られている点において、本研修の構成が学びを深めるプロセスとなっていることが示唆される。こうしたことが可能となった背景には、自身の体験の振り返りの時間を確保することや、グループワークを通じたディスカッションにより、自分の実践に照らし合わせたり、他の参加者の体験を聞くことを通して新たな知見への理解を深め、互いに支え合うことで生まれる安全・安心な中で自分の中に内容を落とし込む作業の時間が、有効に活用されていたことが示唆される。ただし、こうしたプロセスは、参加者自身のトラウマに触れるきっかけともなることから、参加者の傷つきやトラウマ反応への配慮も求められるといえ、主催者側には常に研修時間内の環境を安全・安心な場として機能させる工夫が求められる。また、網羅した内容量の多さから初学者にとっては十分に理解し、知識として活用するためには十分な振り返りが求められることも言及された。このことから、今後研修を構成する際には、TICに関する学びの習熟度別のコースを設定し、参加対象者の知識や実践に応じた研修の選択肢を増やしていくことを検討する必要もある。

IV-3. 研修内容と参加者の反応について

TICを学ぶ際、参加者はトラウマとその影響についての知識を得たうえで、支援対象者への関わり方のスキルを習得したいという具体的な希望を持つことが多い。そのため、本研修においてもはじめに第1部で「トラウマへの理解を深める」を取り上げ、参加者がすでに持っていると思われる知識の整理と、最新の科学的根拠に基づく情報と合わせて解説した。第1部に関しては、基本的な内容の確認と具体的な説明、知識を整理するためのクイズやグループディスカッションの導入により理解が進んだと同時に、科学的根拠に基づく脳・神経系の影響を含めた解説により、トラウマの影響に関するより秩序立った整理が進んだことが言及された。

しかし、TICの導入や普及には困難が伴うことはすでに述べた。その困難を理解するうえでは、第2部の「パラダイムの転換 TICとは」でそのメカニズムを解説することは不可欠であり [6]、我々の住む世界におけるメンタルモデルや世界観への理解を得ることなく、TICを導入することは不可能とさえいえる。そのため、第2部において吹き替え版の動画も含め、TICが必要である背景の世界観について解説した。その結果、公衆衛生的アプローチやパラダイムの転換の必要性に関する理解が得られ、TIC導入の困難さへの理解の深まりや納得が多く見られた。その一方で、日本語吹き替え版の動画によるパラダイム転換の解説の難しさや、そもそも壮大な視点を求められる概念への理解の困難さに関する言及も見られた。こうした難しさは概念をより明確に整理して提示することや、動画の視聴のあり方を再検討する必要性を示している。しかし、それだけでなく、参加者の実践や現場レベル以上の世界観の変化といった壮大な転換が必要なことに対する圧倒される感覚や、考え方の混乱がみられていることも考えられ、参加者によっては、内容により触発される抵抗が生じて

いる可能性が示唆された。これは、TIC の導入や普及に伴う困難で見られる無力感や抵抗と同様のことが生じている可能性が考えられることにも注目する必要がある。こうした世界観の転換にもつなげる内容を提示する際には、参加者自身に様々な反応が生じることもあり、そうした反応も重要な視座を与えるものであることを繰り返し解説することが必要であり、またそれらの内容を消化するための十分な時間と空間を保障することが求められる。

支援者や支援組織が、支援対象者と似た気持ちや考え等を持ち、無力感や変化に抵抗を示すといった現象を「並行プロセス」[6] という。TIC では、トラウマの視点から支援対象者を見ることを提案している。しかし、支援対象者のトラウマにさらされ続けることで、支援者自身のトラウマが喚起されたり、支援者自身の安全・安心が揺るがされる中で、なんとか毎日の業務をこなさなければならない状況に支援者が立たされると、新たな視点を取り入れたい気持ちがあっても、その余裕はなくなる。また支援対象者のトラウマの影響を受けるといふ並行プロセスの影響により、本来中立的な情報であるはずの新たな視点が、これまでの自身のよって立つ支援のあり方を支えてきた視点の否定として受け取られたり、変化を強いられることへの居心地の悪さとしてとらえられ、研修内容に対する抵抗が生じる可能性もある。

こうした支援者に生じる影響についての理解を深めることを目的に、第 3 部「支援者や組織へのトラウマの影響」は、トラウマのある支援対象者を支援することがどのような影響を支援者や支援組織に及ぼすかを概観するとともに、支援者自身についてふりかえるワークやディスカッションを取り入れた構成となっている。初めて学ぶ内容だったという参加者もあり、これまで支援者や支援組織にどのような影響が及ぶかに関する知見が知られていないばかりか、「セルフケア」としてこれまで支援対象者のトラウマの影響は、支援者自身の自己管理や自己責任の問題としてとらえられてきた風潮が改めて浮き彫りとなった。

第 3 部では、「セルフケア」を個人の責任に処すのではなく、組織全体として取り組む必要があり、業務時間中にもでき、日常的に取り組むことができる対処方略をいくつか紹介し、ワークで体験した。こうしたことで、自分自身とともに支援組織の状況への客観的な振り返りが可能となったとともに、支援者への支援対象者のトラウマの影響に関する気づきと対処方略まで学ぶことができた点が評価された。参加者の中には、研修参加中に自身や組織に起きていることを振り返ることにしんどさを感じ、グループワーク等では少し距離を置くといった対処をとった者もいた。主催者側として TIC 研修を計画する際には、研修時間中をいかに安全・安心な場として整えるかが重要といえ、参加者にトラウマ反応が生じることがあるかもしれないことを周知し、その際の対処方法についても事前に伝えておく等の工夫が求められる。

こうした一連の内容がつながることを通して、第 4 部「安全な環境を創る」で安全・安心について改めてその重要性を認識し、その具体的方略についての話し合いが促進された。最終部である第 4 部では、同じグループでの話し合いを重ねてきていることもあり、ワークやディスカッション、その後の全体シェアリングや講師のコメントすべてが合わさって、TIC への理解を促進することにつながったことが言及された。TIC では、支援対象者への

具体的な関わりスキルを超えた変化の必要性が期待されるが、そのことへの意味づけを伴った理解が、本研修の4部構成を通して導かれたことが示唆された。

IV-4. 職場への適用可能性について

TICの導入には、支援対象者を支援する以前にまず支援者自身と支援組織の環境に注目し、安全・安心を導入することが求められる。4部構成の本研修を通して、こうした点における理解の深まりは得られたといえ、各参加者がどのように自身の職場にこれを適用していくかに関する言及が多く得られた。トラウマの知識やトラウマの影響による言動の変化と関わり方のヒントについての情報共有や、衝撃的な内容を話すときの話し方や安全の築き方、環境整備など、職場での取り組みが明確になったとする声や、組織単位で意識することで支援者のパフォーマンスも変わるとする声があった。その一方で、既存の価値観や信念、風土に対して組織全体でまず気づくことの難しさ、そこからのパラダイム転換という大きな動きを職場で生むことの困難、児童福祉だけでなく、医療、福祉、司法すべてにまたがる変革の必要性なども指摘され、TICの職場への普及に対する具体的なイメージがつかない現状もみられた。こうした難しさがあるからこそ、主催者側への要望として、支援組織と共有する際により具体的な道筋の提示や職場研修用資料の提供希望、多業種にも同様に影響が及ぼされることへの言及が示されたといえる。

V 今後の課題

本研修はオンライン形式での実施であったことから、全国から研究協力者の協力が得られたことで、多様な地域の実情に沿った自由記載内容が得られたことが示唆される。一方で、対象者数が少ないことから、より大きなサンプルサイズでのさらなる検証とが求められる。また、研修内容が膨大であったことから、各概念や内容に対するより詳細で具体例を交えた解説を希望する声や、時間不足を感じた参加者もあり、多様な支援者が本研修内容を実践に適用するためには、さらなる内容の精査や研修終了後の継続研修やコンサルテーション・スーパービジョン等を導入する必要性が示唆される。

引用文献

- [1] 浅野恭子、亀岡智美、田中英三郎，“児童相談所における被虐待児へのトラウマインフォームド・ケア,” *児童青年精神医学とその近接領域*, 57(5), pp. 748-757, 2016.
- [2] 野坂祐子, *トラウマインフォームドケア*, 日本評論社, 2019.
- [3] 増沢高, “『社会的養護（児童福祉施設）における人材育成に係る要件に関する調査』報告書,” 公益財団法人資生堂社会福祉事業財団, 2016.
- [4] Walsh, C., Pauter, S., & Hendricks, A., *Child Welfare Trauma Training Toolkit (3rd ed.)*, Los Angeles, CA, and Durham, NC: National Center for Child Traumatic Stress, 2020.

- [5] 厚生労働省, “2020 年 (令和 2 年) 雇用動向調査結果の概要,”
https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/doukou/21-2/dl/kekka_gaiyo-02.pdf. [アクセス日: 2022 年 1 月 20 日].
- [6] Bloom S.L. and Farragher,B., Restoring Sanctuary: A New Operating System for Trauma-informed Systems of Care, Oxford University Press, 2013.